

## クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2020 納富 信留

## ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



朝日講座「西洋古代が抱えた不安」資料  
マルクス・アウレリウス『自省録』を読む

\*岩波文庫、神谷美恵子訳、1956年：神谷美恵子、1914～1979年、精神科医

【1】第2巻12 「なんとすべてのものはすみやかに消え失せてしまうことだろう。その体自体は宇宙の中に、それに関する記憶は永遠の中に。すべて感覚的なもの、特に快樂をもって我々を魅惑するものの、苦痛をもって我々を怖れしむるもの、虚栄心の喝采を受けるものなどは、どんなものなのであろう。なんとそれはやすっぽく、いやしく、きたなく、腐敗しやすく、死んでいることであらう。これは我々の知能で理解のできることだ。その意見やお声がかかりが名声を（与える）ところの人びとはそもそも何者であるか。死ぬということはなんであるか。もし我々が死それ自体をながめ、理性の分析によって死からその空想的要素を取り去るならば、それは自然のわざ以外の何ものでもないと考えざるをえないであらう。自然のわざを恐れる者があるならば、それは子供じみている。しかも死は単に自然のわざであるのみならず、自然にとって有益なことでもあるのだ。

いかにして人間は神に接触するか。人間のどんな部分によって、また人間のその部分がどんな具合になって接触するのか。」

【2】第3巻10 「ほかのものは全部投げ捨ててただこれら少数のことを守れ。それと同時に記憶せよ、各人はただ現在、この一瞬間にすぎない現在のみを生きるのだということ。その他はすでに生きられてしまったか、もしくはまだ未知のものに属する。ゆえに各人の一生は小さく、彼の生きる地上の片隅も小さい。またもつとも長く続く死後の名声といえども小さく、それもすみやかに死に行く小子どもが次々とこれを受けついで行くことによるにすぎない。その小子どもは自己を知らず、まして大昔に死んでしまった人間のことなど知る由もないのである。」

【3】第4巻37 「間もなく君は死んでしまう。それなのに君はまだ単純でもなく、平静でもなく、外的な事柄によって害を受けまいかという疑惑から解放されてもおらず、あらゆる人にたいして善意をいだいているわけでもなく、知恵はただ正しい行動をなすにありと考えることもしていないのだ。」

【4】第7巻47 「星とともに走っている者として星の運行をながめよ。また元素が互いに変化し合うのを絶えず思い浮べよ。かかる想念は我々の地上生活の汚れを潔め去ってくれる。」

【5】第7巻54 「至るところ、至る時において君できること〔君次第〕は、現在自分の身に起っている事柄にたいして敬虔な満足の念をいだき、現在周囲にいる人びとにたいして正義にかなった振舞いをなし、現在考えていることに全注意を注ぎ、充分把握されていないものはいっさいそこに忍び込む余地のないようにすることである。」

【6】第8巻52 「宇宙がなんであるかを知らぬ者は、自分がどこにいるかを知らない。宇宙がなんのために存在しているかを知らぬ者は、自分がなんであるかを知らず、宇宙がなんであるかをも知らない。しかるにこのような問題を一つでも等閑に付しておいた者は、自分がなんのために存在するかいえないであろう。しかれば、自分たちがどこにいるかということも、何者であるかということも知らないことも知らないで(むやみに)拍手喝采するような連中の〔非難を避けたり賞讃を求めたりする〕人間——こういう人間を君をどう考えるか。」

【7】第9巻30 「高処から眺めよ。無数の集会や無数の儀式を、嵐や風の種々な航海を、生まれ、共に生き、消え去って行く人びとの有為転変を。また昔他の人びとによって生きられた人生、君の後に生きられるであろう人生、現在野蛮民族のところで生きられている人生を思い見よ。どれだけの人間が君の名前を知らないことか。どれだけの人間がそれをさっさと忘れてしまうことか。どれだけの人間が現在たぶん君を讃めていながら、たちまち君を悪くいうようになるであろうことか。記憶も、名声も、その他すべていかに数うるに足らぬものあることか。」

【8】第11巻16 「もっとも高貴な人生を生きるに必要な力は魂の中にそなわっている。ただしそれはどうでもいい事柄にたいして無関心であることを条件とする。これに無関心になるには、かかる事柄の一つ一つをその構成要素に分析してながめ、同時に全体としてながめ、そのうち一つとして自己に関する意見を我々に押し付けるものものなく、また我々のところへ侵入してくるものもないということを記憶すればよい。これらのものはじっとしているのであって、これに関する判断を産み出し、我々の脳裡にそれを刻み込むのは我々自身なのである。しかしそれを刻み込まないことは我々の自由なのだし、また知らない間にそれが忍び込んでいた場合にはただちにこれを消し去ることも我々の自由なのである。また記憶すべきはこういうことに注意しているのもわずかの間のことで、やがて人生は終りを告げるであることだ。そもそも物事が具合悪くできているとって不平を鳴らすことがあろうか。もしこれが自然にかなったことなら、喜んで受け入れ、これを苦にするな。しかしもしこれが自然に反したことならば、なにが君にとって君の自然にかなったことなのかを追求し、たとえそれが評判の良くないことであろうともこれに向かって努力せよ。なぜならば、自己の善を追い求めることは万人に許されていることなのだから。」